SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

# コミュニケーション活動がもたらす生徒と教師の変容：グループアプローチの視点から



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-06-08<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 廣田, 憲一<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.14945/00010228 |

# コミュニケーション活動がもたらす生徒と教師の変容

――グループアプローチの視点から――

廣田　憲一

Communicative Activities and the Transformation of Students and Teachers:
A Group Approach

Kenichi HIROTA

## 1. コミュニケーションと学校教育をめぐる今日的課題とアクションリサーチの目的

一般社会における今日的課題を見てみると、経済協力開発機構（OECD）は、知識基盤社会の時代を担う子どもたちに必要な主要能力（キー・コンピテンシー）として、「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」を取り上げており、情報機器の発展によって、ある意味、社会的な絆が弱まりつつある中で、新たな絆や強い絆を形づくることが極めて重要であるとの認識がある。そして、日本国内においては、経団連が毎年発表している「選考時に重視する要素」によると、企業が学生に求める力の第1位は、12年連続で「コミュニケーション能力」となっている。

現在の中学校学習指導要領では、言語活動の充実に重点が置かれ、教え合いなどの話し合い活動が多く行われており、中学校学習指導要領総則には「教師と生徒および生徒相互の人間関係を深めるとともに、（中略）豊かな体験を通して生徒の内面に根差した道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない」と述べられている。また、これまでの教職経験や連携協力校での観察から、「言った」「言ってない」のような小さなコミュニケーション上のトラブルが、あっという間にいじめ等の大きな問題や悲しい事件に発展していくことが現実に起こっているように、人間関係トラブルの背後にあるのが、コミュニケーションのズレであると考えられる。そして、文部科学省による「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の中で、友人関係をめぐる問題で特に効果のあった学校の措置として、① 触れ合いを増やす、② 友人関係の改善、③ 活動場面の用意、という項目が上位に挙げられていた。

以上のことから、学校において教師が生徒の変容を促すことができるのは、他の生徒との関わりや教師の支援であると考え、生徒の人間関係づくりを促進するためのコミュニケーション活動を中心としたグループアプローチ授業を複数回継続的に実施し、その効果やもたらすものについて検証することを目的した。また、このような活動を通して、教師自身が子どもの見方や捉え方についてどのように変容していくのか検証することも合わせて目的とした。

## 2. アクションリサーチの方法

A市立B中学校2年生（全3クラス89名）と2年部職員（5名）を対象とした。

アクションリサーチの全体計画（図2-1）としては、生徒に対してコミュニケーション活動を含むグループアプローチ授業を5回行い、振り返りとしてワークシートに自由記述を書いてもらった。その自由記述から、活動の意味する内容の共通性や類似性に着目し、キーワードをカテゴリーに分けて考察を行った。また、グループアプローチ授業がもたらす影響を調べるために、栗原・井上(2010)による学校環境適応感尺度アセスと、原田・石田・遠藤・伊田（2015）による静岡大学教職大学院版生徒指導支援質問紙を使い、複数の指標から生徒の変容を調べた。

2年部職員に対しては、毎週定期的な通信を発行したり、各グループアプローチ授業終了後にインタビュー調査を行ったり、5回の授業を通してのアンケートを実施したりした。インタビュー調査やアンケートの自由記述から、教師の子どもの見方の変容を考察した。

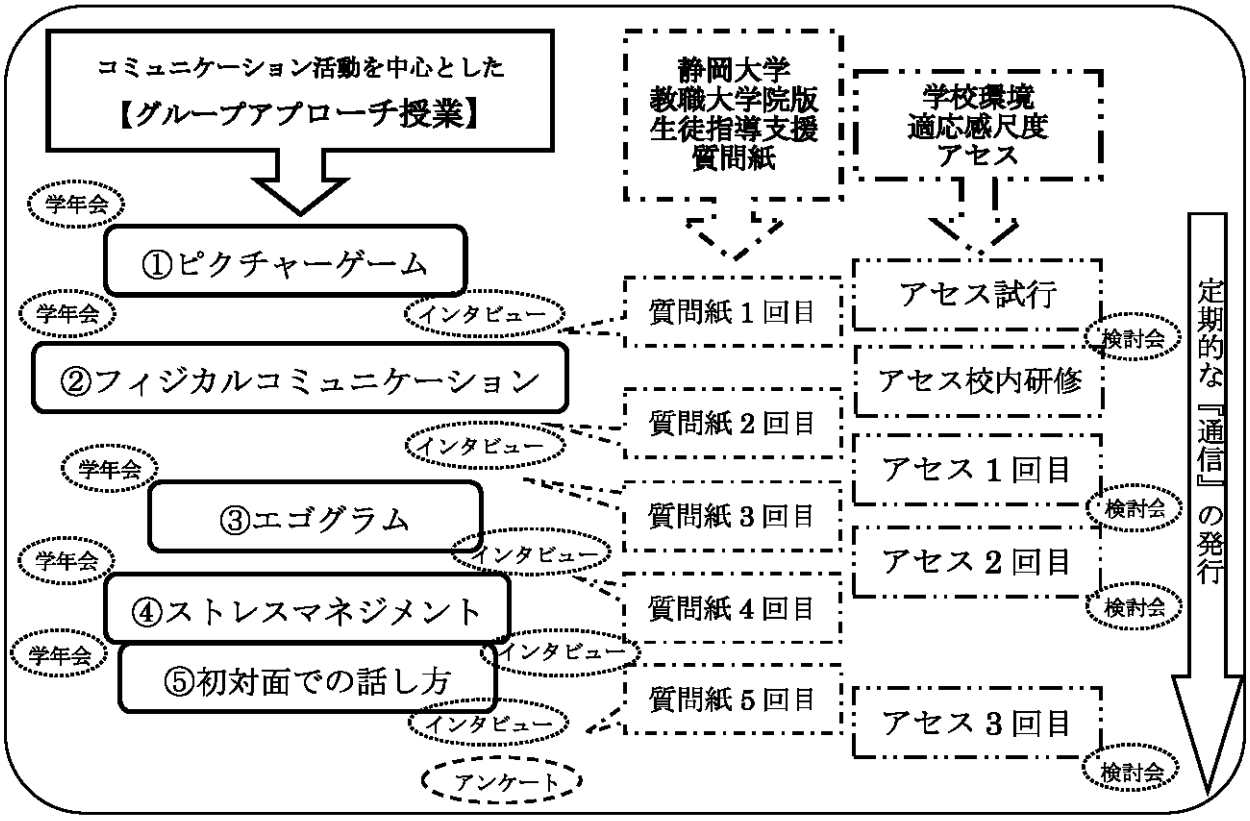


図 2-1　アクションリサーチ全体計画

### 3.　『通信』を媒介にした教師との協働体制の構築

静岡大学教職大学院のテーマでもある「理論と実践の往還」を目指し、学校現場と理論の橋渡し役となって現場の先生方に役立つことを目的とし、教職大学院で学んでいる授業や関連書籍等を中心にした内容の通信を定期的に発行した。

先生方の反応としては、「いつも、考えるきっかけをもらって本当に勉強になります」「多くの視点や手立てをたくさん知ることができて、とても助かった」など前向きな様子が見られた。普段の教育活動からは見ることができない生徒の実態を、第三者の視点から伝えることが先生方に受け入れられたことがうかがわれた。教育活動の当事者である現場の先生が見過ごしたり、気づくことができなかったりする生徒の表れを、第三者的な視点から伝えることは、生徒の理解を手助けする意味で効果的であったと考えられる。その他にも、通信には教職大学院への修学によって獲得できた教育実践や生徒理解に関する最新の情報であったり、生徒の言動を説明する理論的背景を掲載したりすることを心がけた結果、職員にとっては日常の授業や生徒指導に関する理論的根拠を提供する重要な情報源となったと考えられる。

以上のことから、生徒の対人関係面の課題を共有し、共に連携協力しながら、アクションリサーチ活動への前向きな姿勢を得る結果に結びついたと言える。

## 4. コミュニケーション活動を中心としたグループアプローチ授業

次の(1)～(5)で、5回のコミュニケーション活動を含む「グループアプローチ授業」についての内容や結果と考察を示す。各授業後に記入した生徒の自由記述からキーワードを挙げ、活動の意味する内容の共通性や類似性に着目して、いくつかのカテゴリーに分けて分析し考察した。

### (1) ピクチャーゲーム

4グループで、1人が話し手となって1つの図や絵を言葉だけで伝える。残りの3人は聞き手となって、話し手の言った言葉だけを頼りに、その図や絵を書く活動である。このバーバルコミュニケーション活動を通して「言葉で自分の思いや考えを伝えることの難しさや大切さ」を感じ「いろいろなものの見方や考え方があることを理解し寛容の心をもとうとする判断力」を育てることとした。

自由記述からは、生徒にとってのコミュニケーション活動が、「活動を通して実感された感情の交流」と「コミュニケーションを行うこと自体の意味」というように、大きく2つのことに分けて捉えられていることが分かった。

### (2) フィジカルコミュニケーション

仲間と一緒に触れ合いながら、簡単なことでも一緒にできたという成功体験や協力しようとする体験を通して、「生徒同士の心の絆を深め、様々なコミュニケーションについての理解を深める」ことを目的とした。

自由記述からは、生徒はフィジカルコミュニケーションの特性を実感し、体験中に生じた感情について着目し、その面白さに気づき、このような経験を今後も強く期待していることが分かった。

### (3) エゴグラム

エゴグラムとは、精神科医エリック・バーンの交流分析をベースに考案された性格分析手法で、人の心を5つの状態に分類し、そのエネルギーの配分をグラフ化することで、その人の性格の傾向を捉える活動である。それらの資料をもとに、付箋を利用したり、ファシリテーターを立てたりして、グループでブレーンストーミングを行って考えるコミュニケーション活動を行った。

自由記述からは、他者との関わり合いの中で、自分の気持ちに対して、プラス面やマイナス面それぞれの可能性があるという自己理解を深めることができた。

### (4) ストレスマネジメント

竹田（2015）によるストレスマネジメント授業プログラムを用いて、人の認知の歪みを身近なものとして親しみやすく理解しやすいようにイメージキャラクターを用いて進めていく授業である。自分の心と向き合うことをはじめ、課題を解決する方法をグループで考えて共有した。

自由記述からは、心の中の考え方によって気持ちが変化することを実感し、自分や他人の考え方の傾向を理解したり、その意味することを認識するために柔軟な考え方ができるようになったりした。自己理解と自己受容、他者理解を深めることができた。

### (5) 初対面での話し方

初対面の人に対する敬語などの言葉遣いや態度について、グループで事例検討を行ったり、ロールプレイでお互いに確認や評価を相互に行ったりした。この活動を通して、敬語表現や話し方、態度等について学び、スムーズに会話できるコミュニケーション力の向上を図った。

自由記述からは、他人にわかりやすく伝える方法（コミュニケーションスキル）や話す姿勢（身体性）を活かす術を身につけようとすることで、自己理解や他者理解を深めることができた。

## 5. 質問紙法による効果検証

### (1)学校環境適応感尺度「アセス」

栗原・井上（2010）による学校環境適応感尺度「アセス」（ASSESS：Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres）は、学校適応感理論をもとに、大きく「生活満足感」、「学習的適応」、「対人的適応（教師サポート、友人サポート、向社会的スキル、非侵害的関係）」の「3つの観点（6下位尺度）」から学校適応感をとらえることができる構図（図5-1）のアセスメントツールである。学校適応感だけでなく生活満足感も測定するため、学校外での生活に関する満足感も間接的に知ることにより、全体的適応を知ることができる。生徒が34項目のアンケートに答え、その結果をパソコンに入力することによって、「個人特性票（図5-2）」「学級内分布票（図5-3）」をはじめ、「学級平均票」「学級間分布票」を含む4種類のシートを打ち出すことができる。

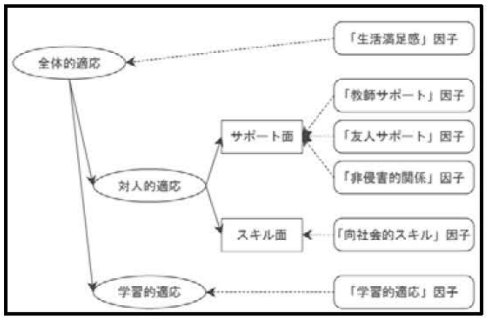


図5-1　アセスの構造

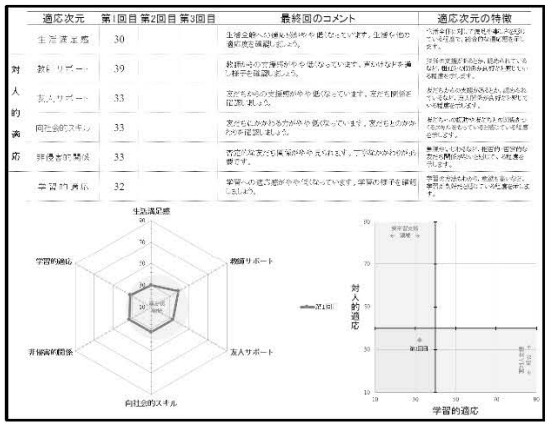


図5-2　アセスの個人特性票イメージ

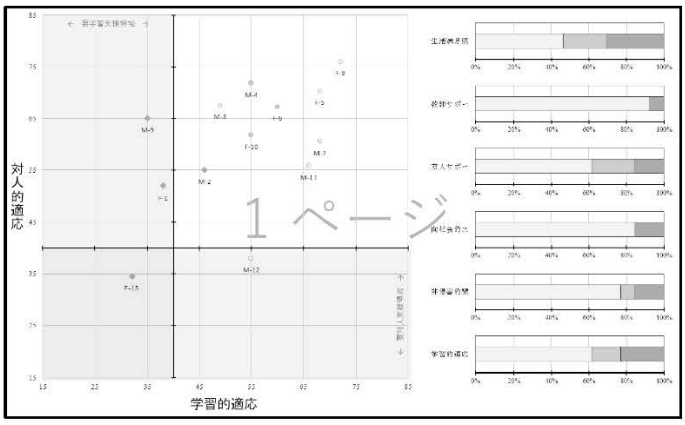


図5-3　アセスの学級内分布票イメージ

また、主な特徴としては、①本人の主観的な適応感、とりわけSOSのサインを出している児童生徒のピックアップに有効である、②児童生徒の適応感の全体を、包括的かつ多面的に判断できる尺度になっている、③家庭のことを聞かずに、学校以外の場での適応状態を推測できる尺度になっている、④教師側の関わりを生徒がどう受け止めているか、教師側の思いが空回りしていないか確認できる、という4つがある。

学年全体の平均得点を表5-1に示す。対人的適応にあたる教師サポート、友人サポート、向社会的スキル、非侵害的関係の4つの因子は55～59というやや高い得点を維持することができた。

表5-1　アセス6因子得点

| | 適応次元 | 第1回目 | 第2回目 | 第3回目 |
|---|---|---|---|---|
| | 生活満足感 | 54 | 53 | 53 |
| 対人的適応 | 教師サポート | 58 | 58 | 59 |
| | 友人サポート | 57 | 57 | 56 |
| | 向社会的スキル | 56 | 55 | 55 |
| | 非侵害的関係 | 55 | 56 | 57 |
| | 学習的適応 | 51 | 52 | 50 |

加藤・太田・松下・三井（2015）では、中学2年生の2学期までは自尊心が低下することや、学校生活を肯定的に捉える意識は他学年に比べて2年生が低いこと、そして教師と生徒の関係では、2年生の3学期まで下がり続けるということなどが示されている。そして、中学2年生という発達段階は「思春期」「中だるみ」「不安定」と言われることがあり、対人的適応に関する数値は下がりぎみになってもおかしくない。このような中で、対人的適応の4つの因子について、どの因子もほぼ現状を維持することができた。

以上のことから、コミュニケーション活動を中心としたグループアプローチ授業を定期的継続的に実施することで、生徒の対人的な適応の促進に効果があったと考えることができる。

**(2) 静岡大学教職大学院版 生徒指導支援質問紙**

学習や生活への意欲、クラスでの安心感や貢献感、自己肯定感など、幅広い内容を 12 項目に集約した「静岡大学教職大学院版 生徒指導支援質問紙」(図 5-5) を用いた調査を行った。項目数が限られているため比較的短時間で実施しやすい特徴があるため、学校生活の節目となる時期に定期的に 5 回実施した。フィジカルコミュニケーション活動の前後の時期に行った 1 回目と 2 回目の変化では 12 項目すべて、1 回目と 5 回目の変化では 12 項目中 10 項目において上昇傾向が見られた。特に、コミュニケーションを含む人間関係に関する質問 4～10 においては、7 項目中 6 項目において上昇傾向にあった。また、質問項目全体を通してみると、すべての質問項目において、平均値が 3～4 というやや高い水準を維持することができた。

＜ 質 問 ＞

以下に 12 の文章があります。それぞれの文章の内容が自分のことにどのくらい当てはまるかを選択肢の中から 1 つ選んで，文章の右にある数字を○で囲んでください。

【選択肢】

とても当てはまる「5」，　わりと当てはまる「4」，　どちらとも言えない「3」

あまり当てはまらない「2」，　まったく当てはまらない「1」

回答例：「わりと当てはまる」の場合 → 5 ④ 3 2 1

1. 学校の勉強には自分から自主的に取り組んでいる …… 5 4 3 2 1
2. いろいろなことにチャレンジするのが好きだ …… 5 4 3 2 1
3. 自分の将来に希望をもっている …… 5 4 3 2 1
4. 学校では自分の気持ちを素直に出せていると思う …… 5 4 3 2 1
5. 学校ではまわりに気をくばることができていると思う …… 5 4 3 2 1
6. クラスの中にいると，ほっとしたり，明るい気分になる …… 5 4 3 2 1
7. 自分もクラスの活動に貢献していると思う …… 5 4 3 2 1
8. 学校の友だちとは何でも相談することができると思う …… 5 4 3 2 1
9. 人と仲よくしたり友人関係をよくする方法を知っている …… 5 4 3 2 1
10. 人の気持ちや微妙な表情の変化を読み取るのが上手だ …… 5 4 3 2 1
11. いつも自分のしたいことがわかっている …… 5 4 3 2 1
12. だいたいにおいて，自分に満足している …… 5 4 3 2 1

図 5-5　生徒指導支援質問紙

以上のことから、コミュニケーション活動を中心としたグループアプローチ授業を定期的継続的に実施することが、生徒のコミュニケーションを含む人間関係に影響を及ぼすことが示唆された。

## 6. アクションリサーチの総合考察

### (1) 生徒の変容

5 つの「コミュニケーション活動を中心としたグループアプローチ授業」から見た生徒の変容を、先に述べたような自由記述の意味する内容の共通性や類似性に注目し、カテゴリーに分類したものを一覧に整理した (表 6-1)。

表 6-1　自由記述のカテゴリー

| (1) ピクチャーゲーム | (2) フィジカルコミュニケーション | (3) エゴグラム | (4) ストレスマネジメント | (5) 視聞覚の活し方 |
|---|---|---|---|---|
| 活かし方 | 活かし方 | 活かし方 | 活かし方 | 活かし方 |
| プラス面 | プラス面 | プラス面 | プラス面 | プラス面 |
| マイナス面 | マイナス面 | マイナス面 | マイナス面 | マイナス面 |
| コミュニケーションツール | コミュニケーションツール | コミュニケーション | 内省 | コミュニケーション |
| 心の捉え方 | 活動自体 | 気持ち | 教材自体 | コミュニケーションスキル |
| 活動の捉え方 | 心の捉え | 可能性 | 活動認識 | 身体性 |
| | 自他 | 他者 | 自他 | 他者 |
| | | | 心 | |

例えば、「活かし方」という共通のカテゴリーの中にも、大きく分けて「時間軸的な見方での活かし方」や「方法的な見方での活かし方」という 2 つの「活かし方」があった。このことから、5 つ全てのコミュニケーション活動を「活かしたい」という生徒の主体的・能動的な強い気持ちを引き出すことができたことが分かった。「プラス面」と「マイナス面」という 2 つのカテゴリーも「活かし方」と同じように、全てのグループアプローチ授業において共通していたカテゴリーである。「活かし方」と同じところとしては、「活動“自体”がどうだったか」という点である。例えば、今日の授業・活動が「楽しい」「面白い」「できた」、「難しい」「できない」ということである。やや違うところとしては、「プラス思考で考えることが大事である」「ネガティブな気持ちは」「敬語を使って話すのは大変」「前向きな声をかけてもらったので」というように、「活動内容の意味についてどう思ったか」という点である。Fredrickson(2009)における「拡張-形成理論(broaden-and-build theory)」、すなわち「喜び、安らぎなどのポジティブ感情は、思考-行動のレパートリーを拡張させ、身体的、

認知的、社会的な個人資源を継続的に形成する」という考え方に基づいて考えると、特にこの「プラス面」に関して、各コミュニケーション活動を中心としたグループアプローチ活動で獲得したポジティブ感情が、子どもたちの思考-行動の幅を広げ、コミュニケーションに関することについて継続的に形成する力が身につく可能性が高いことが示唆された。

以上のことから、5つ全てのグループアプローチ授業が、多様なプラス面やマイナス面の側面を含みながら変化を引き起こすきっかけとなり、コミュニケーションに関わる知識を知恵として発展させ、成長したいと願って努力し、自らその成長を実感している生徒が多いことが分かった。

**(2)教師の子どもの見方の変容**

グループアプローチ授業を実施する前の学年会による検討会や授業実践、そして授業後のインタビュー、アセス実施後の学年検討会等を通して、徐々に先生方同士の意見交流や議論等も増えていった。先生方それぞれが意見をもっていることは承知していたが、「傍観、観衆の立場からいじめを考えたい」「規範意識に関することで、“ノリでやった”ことがいじめなんて……という感覚のおかしさを考えさせたい」「グループで話し合わないと達成できない活動に挑戦させたい」「進路選択に向けて自問自答が必要になる活動を行いたい」「生徒が他の子と関わることで自分自身を客観的に見ることができる活動を行いたい」など、コミュニケーション活動を通して、子どもたちに自己理解や自己受容、他者理解や他者受容を中心とした子どもの捉え方の幅が広がり、生徒理解の深化の度合いも変化していく様子がうかがえた。

## 7. まとめと今後の展望

今回のアクションリサーチ活動は、様々な形態によるコミュニケーション活動の中で、生徒同士のコミュニケーションや教師同士のコミュニケーションが大切であるという当たり前の再確認や再発見であり、そしてB中学校という一事例でもある。しかし、先に述べたように、社会的要請が高まっているコミュニケーション能力はもちろん、主体性や協調性も重視した上で、意識的・継続的に「コミュニケーション活動」を行っていくことが、子ども達のみならず大人である教師にとっても十分価値あることであると、今回のアクションリサーチの過程、そして結果と考察から分かった。

今回のグループアプローチ授業は、連携協力校の実態に応じて、様々な知見をいくつか組み合わせ定期的に行った形としたが、今後、コミュニケーション活動を用いたグループアプローチ授業に関することを1つの柱とした教材やプログラムの開発を手掛けていきたいと考えている。

## 8. 参考文献・引用文献

栗原 慎二・井上 弥（2010）．アセスの使い方・活かし方　ほんの森出版

竹田 伸也（2015）．ストレスマネジメント授業プログラム　遠見書房

加藤 弘通・太田 正義・松下 真美子・三井 由里（2015）．思春期の自尊心低下の要因とそれを抑止する授業づくりの検討　科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書

Fredrickson, B. L. (2009). *Positivity: Top-notch Research Reveals the 3 to 1 Ratio That Will Change Your Life*. New York: Three Rivers Press. （フレドリクソン, B. L., 植木理恵（監修）, 高橋由紀子（訳）（2010）. ポジティブな人だけがうまくいく　3:1の法則　日本実業出版社）